



TITLE:

人生識字憂患始：中國讀書人の憂愁

AUTHOR(S):

川合, 康三

CITATION:

川合, 康三. 人生識字憂患始：中國讀書人の憂愁. 中國文學報 2004, 67: 40-57

ISSUE DATE:

2004-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/177936>

RIGHT:

人生識字憂患始

——中國讀書人の憂愁——

川 合 康 三

京都大學

一 は じ め に

蘇軾（一〇三六—一一〇一）「石蒼舒醉墨堂」詩の冒頭に、「人生 字を識るは憂患の始め」の一句がある。小川環樹博士が指摘されているように、蘇軾の詩のなかには、人生觀、世界觀について普遍的公理を述べた格言のような句が置かれることがある。この一句も、人間は文字の読み書きを覺えたことから様々な心勞が生じるものだ、という普遍的な眞理を語っているかのように見える。

しかしながら、この詩の全體は必ずしも讀書人の憂患を主題としたものではない。七言二十四句の全體は以下のと

おりである。

人生識字憂患始
姓名粗記可以休
何用草書誇神速

人生 字を識るは 憂患の始め
姓名 粗は記せば以て休やむべし
何ぞ用いん 草書の神速を誇ること

開卷恫怳令人愁

卷を開けば恫しやうきやう怳として人をして愁

我嘗好之每自笑
君有此病何能瘳
自言其中有至樂
適意無異逍遙遊

我れ嘗つねに之を好むも毎に自ら笑う
君に此の病有り 何ぞ能く瘳いえん
自ら言う 其の中に至樂有りて
意に適うこと逍遙の遊に異なる無し

近者作堂名醉墨
如飲美酒消百憂
乃知柳子語不妄
病嗜土炭如珍羞
君於此藝亦云至

近者ちかごろ 堂を作りて醉墨と名づく
美酒を飲みて百憂を消すが如しと
乃ち知る 柳子が語の妄ならざるを
病みて土炭を嗜み珍羞の如くす
君 此の藝において亦た云いひに至れり

堆牆敗筆如山丘

牆に^{うすたか}堆き敗筆は山丘の如し

興來一揮百紙盡

興來りて一たび揮えば百紙盡く

駿馬倏忽踏九州

駿馬 倏忽として九州を踏む

我書意造本無法

我が書は意造にして本より法無し

點畫信手煩推求

點畫 手に信^{よか}せて推求を煩わす

胡爲議論獨見假

胡爲^{なんすれ}ぞ 議論 獨り假されて

隻字片紙皆藏收

隻字 片紙 皆な藏收せらる

不減鍾張君自足

鍾(繇)・張(芝)に減ぜざるは君自
ら足れり

下方羅趙我亦優

下は羅(暉)・趙(襲)に方^{くら}ぶれば我

れも亦た優る

不須臨池更苦學

須^{もち}いず 池に臨みて更に苦學するを

完取絹素充衾褥

絹素を完取して衾褥に充てよ

この詩は熙寧二年(一〇六九)八月、蘇軾三十四歳、開封にあつて監官誥院の任務に就いていた時の作とされる。

詩題にみえる石蒼舒は字才美、または才叔、才翁、草書の名手として名が知られていた。詩はその石蒼舒の草書を深

いところで賛美しながらも、表層では書というものに對して距離を置き、わざとつれない態度を装っている。その最初に置かれているのが、「人生識字憂患始、姓名粗記可以休」の二句である。人生は文字を修得することから悲しみが始まるものだ。文字というのは、自分の姓名を書くことができる、それでもう十分だ。第二句は周知のとおり、

『史記』卷七、項羽本紀の「書足以記名姓而已。劍一人敵、不足學。學萬人敵」から出る。文字は實用のものであつて、必要な事柄を傳達すればそれでよい。傳達もできない草書は字の本來の役割をはずれている、というのである。草書に熟達する石蒼舒に對して、敢えてそれと對峙する態度を設けるために言い起こされたここでは、文字は生活の場役に立てば十分であつて、實用から離れた書に意義はないことを、少なくとも表面においては主張している。もちろん蘇軾は石蒼舒の草書を評價し、賛美しているのであるが、書の藝術性を自明のものとしてそれに没頭する態度に對して敢えて斜に構えた態度を取る。批判的であるかに見せながら實際には稱えるという錯綜した賞賛の仕方、蘇軾の

詩に特徴的な知的操作の一つである。ちなみに蘇轍の同題の詩（五言十二句。『欒城集』卷三）にも、諧謔を弄する口ぶりは見られるものの、それは誇張した表現から生じているもので、石蒼舒の草書に對する贊美は一貫していて、蘇軾の逆説的な態度とは好對照をなしている。

詩全體の主旨が石蒼舒の草書を讀えるものであるから、「人生識字憂患始」という最初の一句は、全體の意味とは直接繋がっていない。そして「字を識る」ことがもたらす「憂患」についても、この詩のなかでは何も説明されていない。すなわち「人生識字憂患始」は詩全體から浮き上がって置かれている。にもかかわらず、冒頭に置かれたこの一句は、それはそれなりに蘇軾の思いの一端を表していると考えられる。折しも蘇軾は官員の辭令書を書く任務に就いている時期であり、職務としての書類を書くことに對する嫌惡もなにか反映しているであろう。

蘇軾が格言のように言い放ったこの一句は、それが置かれた詩のなかにおける意味を越えて、讀者人が讀者人であることによって憂患の情を抱かざるを得ないという讀者人

の普遍的な思いをずばりと言い切っているものとはいえないか。「人生識字憂患始」の一句から觸發されて、中國讀者人が讀者人であるがゆえに生じる憂患の思いをどのような唱っているか、探ってみたい。

二 中國の讀者人

中國の讀者人、すなわち古典的教養を身につけた人々は、別の角度から言えば官人となる資格をもつ階層であり、支配者階級といつてよい。文化を掌握する者が同時に政治に參與できる權利をも持つという中國の社會體制のなかで、一貫して政治・文化の全體の支配者として君臨したのである。これは中國の讀者人が近代の知識人と異なる大きな特徴ということができる。近代の知識人の場合、古典的教養を備えることはその條件のなかに含まれるにしても、直接に必要なのは今、現在に對する透徹した見方であり、現代を透徹して見通すその認識力によってしばしば時代の政治權力者とは位相を異にする存在となる。そもそも知識階級 *intelligentsiya* は十九世紀の帝政ロシアにおいて農奴を救

済しようとする舊體制批判から發したものであり、社會にとって必要な存在ではあるが、それは政治體制とは一線を劃することによって存在意義を有しているのである。近代國家が成立したあとの知識階級には官僚制組織のなかで機能する知識人も生まれたにせよ、政治の力からは自由なところに位置するところにその本質がある。

従つてその内實も政治とは異なる性格を帯びている。政治家が決斷と實行によつて力を發揮するものであるのに對して、知識人は認識と判斷を本領とする。ここに兩者の本質的な相違がある。知識人はたとえ透徹した認識を獲得したとしても、透徹していればいるほど、それは政治の實際からは遊離したものとなり、或いは輕視されるものとなり、知識人の判斷も政治の場における實行からは遠いものとなる。

體制から離れた存在であることは、知識人の identity を常に危うくすることにもなる。體制に保障されないために、知識人は自分が知識人であること、知識人であることの意義を常に問わざるをえない。そこに近代知識人の煩悶と憂

愁が生じる。近代の知識人は認識を本領とするというその本質において、常に憂愁を伴わざるをえない存在なのだ。

それに對して中國の讀書人は、政治體制の内部にもともと組み込まれている。そして讀書人は中國の文化の枠組みによつてその存在が保障されている。彼らは自分一人孤立することはなく、傳統文化の中の共同體として存在しているのであつて、共同體の枠組みのなかにいる限り、讀書人という存在に疑義を抱くことはない。讀書人の identity は極めて安定していたのである。

もちろん彼らにも煩悶はある。一つは公的なもので、彼らが古典的教養を通して得た世界觀が實際の場では實現されていないこと、現實が聖賢の生きていた古代の理想的社會とはほど遠いこと、その認識がもたらす煩悶である。二つは個人的なもので、かく政治的能力を持つと信じる自分がその能力を發揮できる職務に就けないという不満、いわゆる「賢人失志」の悲哀である。中國古典詩のなかで表明される讀書人の悲哀はほとんどがその二つに集約される。彼らの煩悶も讀書や思索という知的營爲と、政治という行

動の論理が支配する世界との乖離から生じている點では近代知識人と共通するところがあるといえないではないが、しかし政治の場における理想も讀書人個人における理想も、古代の經書の世界の實現であるという點でまったく一致するのであり、そこに本質的乖離は生じない。

しかしながら、中國の讀書人にも讀書人であることから生じる憂愁が時に語られることがある。それを端的に表しているのが、冒頭に掲げた蘇軾の詩句である。それは理想と現實が乖離するとか、自分の能力が社會のなかで有効に生かされていないとかいった、社會との関わりのなかで生じる煩悶とは異なり、自分が讀書人であること、まさにそのこと自體がもたらす憂患の思ひである。しかし讀書人が外界との関わりによってではなく、讀書人の内部において生じる煩悶を吐露する詩は、出現がはなだ遅れるように思われる。

三 唐代詩人の憂愁

魏晉から南北朝に至る時期、すなわち士大夫の理念が形

成されていくその時期にあつては、讀書人であるがゆえの憂愁を唱った詩句は、見出したい。それが出現するのは唐の杜甫（七二—七七〇）まで待たねばならない。たとえば杜甫「醉時歌 贈廣文館博士鄭虔」（『杜詩詳注』卷三）に言う、

諸公袞袞登臺省

諸公 袞袞として臺省に登るも

廣文先生官獨冷

廣文先生は官獨り冷かなり

甲第紛紛厭梁肉

甲第 紛紛として梁肉に厭くも

廣文先生飯不足

廣文先生は飯すら足らず

先生有道出羲皇

先生 道有りて羲皇に出で

先生有才過屈宋

先生 才有りて屈宋に過ぐ

德尊一代常坎軻

德は一代に尊きも常に坎軻

名垂萬古知何用

名は萬古に垂るるも 知んぬ 何の

用ぞ

杜陵野客人更嗤

杜陵の野客 人 更に嗤い

被褐短窄髮如絲

被褐短窄 髮は絲の如し

日糶太倉五升米

日びに太倉五升の米を糶かい

時赴鄭老同襟期

得錢卽相覓

沽酒不復疑

忘形到爾汝

痛飲眞吾師

清夜沈沈動春酌

燈前細雨簷花落

但覺高歌有鬼神

焉知餓死填溝壑

相如逸才親滌器

子雲識字終投閣

先生早賦歸去來

石田茅屋荒蒼若

儒術於我何有哉

孔丘盜跖俱塵埃

不須聞此意慘愴

生前相遇且銜盃

時に鄭老に赴きて襟期を同じくす

錢を得れば卽ち相い覓め

酒を沽いて復た疑わず

形を忘れて爾汝に到り

痛飲は眞に吾が師

清夜 沈沈として春酌を動かし

燈前の細雨 簷花落つ

但だ覺ゆ 高歌して鬼神有るを

焉ぞ知らん 餓死して溝壑を填たす

を

相如 逸才なるも 親みづから器を滌い

子雲 字を識るも終に閣より投ず

先生 早く賦せよ 歸去來

石田 茅屋 蒼苔荒れん

儒術 我において何か有らん哉

孔丘も盜跖も俱に塵埃

須いず 此れを聞きて意慘愴たるを

生前に相い遇えば且く盃を銜まん

人生識字憂患始（川合）

天寶一三載（七五四）、杜甫四十三歳の年の作である。^③時に杜甫は長安にあつていまだに官に就けないまま不如意な日々を過ごしていた。詩の最初の八句は、鄭虔について述べる。鄭虔は玄宗がその才を愛して廣文館博士に任じたほどの才人でありながら、官界にはまったく不向きな、生活能力が缺如した才子であつた。そのみじめな暮らしぶりをユーモアを交えて書きながら、繼いで杜甫自身に移る。無官の杜甫の貧窮はさらにひどい状態にある。周囲からも笑いのものにされている杜甫を自嘲し、自虐的に描き出す。そして鄭虔と杜甫は世間からはみ出したものとして結びつく。二人に共通しているのは、富貴から遠いことのみならず、ともに潜在的な能力・才知を藏していること。ところがその能力を藏するがゆえに、二人とも世の中で恵まれないのだ。そこで思い起こされたのが司馬相如と揚雄の故事である。「相如逸才親滌器、子雲識字終投閣」、「逸才」を懷抱しながらも酒場の食器洗いに甘んじざるを得なかった司馬相如、「字を識」つたために閣から身を投げるはめに陥った揚雄、漢代を代表する二人の文人は唐人にとつて

文人の典型であつた。

揚雄の「識字」の故事は、王莽の王位篡奪を助ける符命に關わるものであつた。『漢書』卷八七下、揚雄傳下によれば、王莽の即位を豫言した符命に關與した甄豐・甄尋及び劉棻（劉棻の子）らが誅殺された時、かつて劉棻に「奇字」を教えた自分も巻き添えになることを恐れて闇から身を投じたものである。すなわち「識字」にまつわる故事には、字を知らないことに開き直つた項羽の故事と、字を知っていることによつて災禍に巻き込まれた揚雄の故事との二つがあり、揚雄の故事は「識字」が憂患をもたらすことを語るものであつた。

杜甫と鄭虔とは、杜甫の認識によれば、二人ともその才知・能力をもつがゆえに不遇を餘儀なくされたのであり、同じ状況にある鄭虔に對して己れを哀れむがごとくに同情と親愛の念を綴っている。二人の不幸の根幹は「字を識」つたことにあり、「字を識」つて儒者となつた杜甫は「儒術於我何有哉」と儒學が世のなかで何の役にも立たないことを嘆くのである。さらに若い時期、天寶七載の時の作と

される「奉贈韋左丞丈二十二韻」（『詳注』卷二）においてもすでに「紈袴 餓死せず、儒冠 多く身を誤る」と、儒者が物質的に常に恵まれない存在であることを嗟嘆している。

ここに込められている憂患が、「君を堯舜の上に致し、更に風俗をして淳からしめん」（『奉贈韋左丞丈二十二韻』）という抱負を抱き、その能力があると自分では信じている杜甫が、現實の場で用いられないことへの不満から生まれている點では、中國古典詩に通有の「賢人失志」の悲しみと變わりはないかのように見える。しかしながら、杜甫の詩句にはそれを個人の境遇のなかだけで嘆くのではなく、廣く讀書人一般の宿命であるかのように捉える態度が含まれていないだろうか。不遇の悲哀を共有する鄭虔と自分とを圍い込むことは、同じ思いを抱く人々の共感をも懷胎している。概して杜甫の文學に見られる慨嘆は、杜甫個人の境遇から發しているにもかかわらず、同時にそれが廣く共有される普遍性を備えているがゆえに、文學たりえているのだが、「字を識」つたことから生じる不遇感を嘆く詩句に

も、讀書人全體に通じる擴がりを帶びているかに思われる。それは後述する陸游の詩句ほどに顯在化してはいないものの、讀書人であることが本質的にもたらす悲哀に通じるところが、單なる不遇の嘆きとは一線を劃しているのである。

一方、唐代には逆に文字を讀み書きできることを幸福として捉える詩もある。白居易は、我が身の幸せをいくつか掲げ、その一つに「字を識」つていることを數えているのである。「狂言示諸姪」(『白居易集』卷二〇、格詩、2048)にいう、

世欺不識字　世は字を識らざるを欺るも^{あなど}
我忝攻文筆　我は忝けなくも文筆を攻む^{おそ}
世欺不得官　世は官を得ざるを欺るも
我忝居班秩　我は忝くも班秩に居る
人老多病苦　人老いれば病苦多きも
我今幸無疾　我れ今　幸いにして疾無し
人老多憂累　人老いれば憂累多きも

人生識字憂患始(川合)

我今婚嫁畢　我れ今　婚嫁畢る
心安不移轉　心安くして移轉せず
身泰無牽率　身泰くして牽率無し
所以十年來^{ゆゑ}　所以に十年來
形神閒且逸　形神　閒にして且つ逸たり
況當垂老歲　況んや垂老の歲に當たり
所要無多物　要むる所は多物無し
一裘煖過冬　一裘あらば煖くして冬を過ぎ
一飯飽終日　一飯あらば飽きて日を終う
勿言舍宅小　舍宅小さしと云う勿かれ
不過寢一室　一室に寢るに過ぎず
何用鞍馬多　何ぞ鞍馬の多きを用いん
不能騎兩匹　兩匹に騎するあたわず
如我優幸身　我の如き優幸の身は
人中十有七　人中　十に七有り
如我知足心　我の如き足るを知る心は
人中百無一　人中　百に一も無し
傍觀愚亦見　傍觀すれば　愚も亦た見る

當己賢多失 己れに當たれば賢も失すること多し
不敢論他人 敢えて他人に論ぜず
狂言示諸姪 狂言 諸姪に示す

開成二年（八三七）、白居易六十六歳の作である。白居易晩年の閑適詩には自分が浸っている幸福感をとっくりと唱う詩が数多くあるが、この詩もその一つである。從來、詩は愁苦を吐露するものとされてきたのに對して、意識的に満足の感情を歌い上げた白居易は、文學に新鮮な情感をもたらしたのみならず、文學の幅を広げる大きな役割を果たしたのだが、その歡びの感情にもさまざまな變容がある。ここでは、世間の基準に則して自分が幸福であることを確認している。そのなかでも筆頭に挙げられているのが「識字」で、世間の人々は文盲を侮るものだが、わたしは文盲どころか書くことを専門としている、と讀み書きできることを自分の幸福の一つに數え上げている。すなわちここでは憂患どころか、「識字」を幸福の條件としてあげているのである。そしてその満足感、世間一般の人々が「識

字」に對して尊敬や羨望を抱く、そうした價值觀にどっぷり浸ったなかから生じているのである。

少なくとも世間一般においては「識字」は求められるものであり、讀み書きができる人に對しては憧憬や尊敬の念を抱いていたであろうことは、當然であろう。白居易には次のような詩もある。

綠衣整頓雙棲起 綠衣整頓して雙つながら棲起し

紅髻分明對語時 紅髻分明たり 對語の時

始覺琵琶弦莽鹵 始めて覺ゆ 琵琶は弦 莽鹵なるを

方知吉了舌參差 はじめて知る 吉了は舌 參差なるを

鄭牛識字吾常嘆 鄭牛は字を識る 吾れ常に嘆ず

自注：諺云、鄭玄家牛觸牆成八字。 諺に云う、鄭玄

の家牛は牆に觸れて八字を成すと。

丁鶴能歌爾亦知 丁鶴は能く歌う 爾も亦た知る

若稱白家鸚鵡鳥 若し白家の鸚鵡鳥を稱すれば

籠中兼合解吟詩 籠中 兼ねて合に解く詩を吟ずべし

〔雙鸚鵡〕卷二六、律詩、2633)

ここにも字を識ること、詩を解することに對するためにはまったくない。白居易が自注で引いていることわざはここにしか見えないものだが、鄭玄の家では牛まで字を書くことができたという言い方のなかにも、一般に字の読み書きが尊ばれていたことがよくあらわれている。

白居易には周知のように自分を「詩魔」とりつかれた者としてたびたび唱っている。「詩魔」は自分に詩を書かざるをえなくさせる魔物、自分を詩から解放させない自分の内部のもう一人の自分であり、あたかも詩人を不幸にさせる存在であるかのようにいう。白居易はそのように自分を「詩魔」とりつかれた詩人であると規定するが、しかしそこには悲哀よりも、詩人であることに對する自負が潜んでいるというべきである。このように白居易には「識字」を幸福とこそすれ、不幸と結びつける發想はみられない。

白居易とならんで中唐の文學を代表するもう一人である韓愈には、子供に與えた「兒に示す」、「符城南に讀書

人生識字憂患始（川合）

す」^⑤詩がある。引かれることの多い詩なので、本文はここに掲げないが、無一物の自分が現在のような地位と名聲、富みを得られたのはすべて學問を身につけたおかげである。だからおまえも勉學に勵まねばならぬ、と自分の經驗をもとに子供に修學を勧める。ここにも白居易と同じく、「文」がもたらす實生活の幸福だけが語られている。文字を識ること、學問を身につけることから生まれる憂患とはまったく無縁といわねばならない。事實、白居易にしても韓愈にしても下層士大夫階級から身を起し、政治の中樞、文化の頂點にまで到達したのは、彼ら自身が努力と能力によつて習得した「文」の力によるものであった。中唐の典型である二人は、「識字」が生活の幸福をもたらしえた時代の申し子だったのである。

しかし晩唐に至ると、「識字」は必ずしも實生活の幸福に結びつかなくなつた。李商隱にもやはり自分の子供を唱つた「驕兒詩」^⑥詩があり、それは韓愈とはあまりにも對照的である。我が子が幼い時から賢かつたことを縷々述べたあと、

爺昔好讀書 爺は昔し 書を讀むを好み

懇苦自著述 懇苦して自ら著述す

憔悴欲四十 憔悴して四十ならんと欲し

無肉畏蚤虱 肉無く蚤虱を畏る

兒慎勿學爺 兒よ慎みて爺を學び

讀書求甲乙 書を讀みて甲乙を求むること勿れ

……

學問に勵んだ自分がこのようにうらぶれた人生を送っている。おまえは愚かな父の二の舞を踏むことのないように。同じく我が子に對する言葉でありながら、韓愈と對極にある。これには韓愈と李商隱という二人の詩人の性格、個性の違い、そしてまた中唐と晚唐との二つの時代の間で、士大夫を取り卷く狀況に變化が生じたことも反映しているであらう。

四 陸 游

「字を識」らない人々に對する羨望の思いをたびたび詩

に吐露しているのは、南宋・陸游（一二二五—一二二〇）で、ことに晩年の詩に目立つ。その「余讀元次山與漢溪鄰里詩意甚愛之取其間四句各作一首亦以示余幽居隣里 峯谷互回映（余 元次山の「漢溪の鄰里に與うる詩」を讀み、意 甚だ之を愛す。其の間の四句を取り、各おの一首を作る。亦た以て余が幽居の隣里に示す 峯谷 互いに回映す）」詩（『劍南詩稿』卷三九）に言う、

北起成孤峯	北に起こりて孤峯を成し
東蟠作幽谷	東に蟠りて幽谷を作す
中有十餘家	中に十餘家有り
蘆藩映茆屋	蘆藩 茆屋に映す
土肥桑柘茂	土肥えて桑柘茂り
雨飽麻豆熟	雨飽ちて麻豆熟す
比鄰通有無	比鄰 有無を通ず
井稅先期足	井稅 期に先んじて足る
煙中語相答	煙中 語 相い答え
月下歌相續	月下 歌 相い續く

兒童不識字 兒童 字を識らず

未必非汝福 未だ必ずしも汝が福に非ざるにあらず

自注：張藝叟過鄭公故莊詩曰、兒童不識字、耕稼鄭公莊。

張藝叟の「鄭公の故莊に過ざる」詩に曰く、「兒

童 字を識らず、耕稼す 鄭公の莊」と。

のだ、と。

自注に記しているのは、徽宗朝の吏部侍郎であつた張舜

民（英宗治平二年、一〇六五、進士）、字藝叟、の「過魏文貞

公舊莊」詩の二句であり、その詩については『老學庵筆

記』卷一に五絶の全文を記している。

錢仲聯校注『劔南詩稿校注』^⑦によれば、慶元五年（一一

九九）七十五歳の夏、故郷にあつての作である。元結の詩

「與漢溪鄰里」^⑧はその「序」によれば、乾元元年（七五八）、

元結は一族郎黨を引き連れて漢溪の地に避難したが、その

人々が困窮に陥っているのを、上元二年（七六一）、軍務の

ために滞在していた九江の地から思いやつた詩である。が、

陸游はそうした一連の経緯は捨象して漢溪だけを取りだし、

それをまるで桃花源のような、小さな理想的集落として描

き出している。豊かな生産物に恵まれ、互いに助け合つて

暮らしている幸福な村落、その最後に置かれたのが、「兒

童不識字、未必非汝福」の二句である。この静かな村でさ

さやかな幸福を味わえば、それはそれで満たされた人生な

張藝叟過魏文貞公舊莊、居者猶魏氏也。爲賦詩云、

「破屋居人少、柴門春草長。兒童不識字、耕稼鄭公莊」。

此猶未失爲農。神宗夜讀宋璟傳、賢其人、詔訪其後、得

於河朔、有裔孫曰宋立、遺像・譜牒・告身皆在。然宋立

者、已投軍矣。欲與一武官、而其人願、乃賜田十頃、

免徭役雜賦云。其微又過於魏氏、言之可爲流涕。

張藝叟は魏文貞公（魏徵）のもとに莊園を訪れたが、

住んでいたのはまだ魏氏一族であつた。そこで詩を作つ

ていう、「破屋 居人少なく、柴門 春草長し。兒童

字を識らず、耕稼す 鄭公の莊」。ここではまだ農業は

續けられている。神宗は夜 宋璟傳を讀み、宋璟を尊敬

して、子孫を搜すよう詔を出し、河朔の地で見つけた。

子孫に宋立という者があり、遺像、譜牒、告身などみなそろつていた。しかし宋立はもはや軍に身を投じて（農地を失つて）いた。武官の官位を授けようとしたが、彼はほしがらないので、農地十頃を與え、徭役や雜賦を免除した。落ちぶれ方は魏氏よりもひどい。語るのも悲しいことである。

張舜民の詩は魏徵の子孫が讀み書きも知らない農民にまで落ちぶれていることに感慨を催したものであり、それを引く『老學庵筆記』も宋璟の子孫の落魄と一つの條にしているように、陸游も張舜民と同様、唐の名相の血筋が沒落したのを哀惜している。しかし「余讀元次山……」詩は農耕にいそしむ暮らしを人間の理想的な生き方と捉えているのであり、それは陸游の別の詩にも重ねて述べられている。

「感事示兒孫」（『劍南詩稿校注』卷四四）にいう、

人生讀書本餘事

人生 書を讀むは本より餘事

惟要閉門修孝弟

惟だ要す 門を閉じて孝弟を修むる

を

畜豚種菜養父兄

豚を畜^かい菜を種えて父兄を養う

此風乃可傳百世

此の風 乃ち百世に傳うべし

我聞長安官道傍

我れ聞く 長安 官道の傍

至今人指魏公莊

今に至るまで人 魏公の莊と指すと

北方俗厚終可憐

北方は俗厚し 終に憐ぶべし

一字不識勤耕桑

一字も識らずして耕桑に勤む

自注：長安有魏鄭公舊莊、裔孫皆力耕、無識字者、張藝

叟嘗過之。

自注：長安に魏鄭公の舊莊有りて、裔孫 皆な力耕し、

字を識る者無し、張藝叟 嘗て之に過^よぎる。

學問よりも農耕に勤める篤實な生き方が稱えられているのである。

さらに陸游七十七歳、嘉泰元年（一二〇一）の「負日戲作」（『劍南詩稿』卷四八）にいう、

困來兩背似膠黏

困じ來たりて兩背は膠黏に似る

底怪吳人號黑甜

底ぞ怪しまん 吳人 黑甜と號する

安得他生不識字

安にか得ん 他生は字を識らずし
を

朝朝就日臥茅簷

朝朝 日に就きて茅簷に臥するを

自注：世傳楊大年見老兵負日、不覺曰、快活。因問、汝

識字否。對曰、不識。大年曰、如此、更快活也。

自注：世に傳う 楊大年 老兵の日を負うを見て、覺え

ず曰く、快活なりと。因りて問う、汝は字を識るや

否やと。對えて曰く、識らずと。大年曰く、此くの

如くんば、更に快活なりと、と。

自注に言う楊億（字大年、九七四—一〇二〇）の話は、沈

括『夢溪筆談』卷二三「譏諍」の條に梅詢（九六四—一〇

四二）の話として見える。

梅詢爲翰林學士。一日、書詔頗多、屬思甚苦。操觚循
堦而行、忽見一老卒臥於日中、缺伸甚適。梅忽嘆曰、暢

人生識字憂患始（川合）

哉。徐問之曰、汝識字乎。曰、不識字。梅曰、更快活也。

梅詢は翰林學士であつたが、ある日、詔書の執筆がたま
つて、思いあぐねていた。文を作りながらきざしを進む
と、ふと一人の老兵卒が日なたで寝ころんで、氣持ちよさ
そうにあくびしているのを目にした。梅詢は思わず、「安
氣だな」と嘆いた。そろりと「お前は読み書きができる
か」と尋ねると、「できません」という。梅詢は「ならば
いつそう氣持ちがよからう」といった。

沈括が梅詢のこととして記録している話を陸游が楊億に
まつわる話として記していることは、『夢溪筆談』のほか
にも同様の話柄を語る文獻があつたのかも知れない。楊億
にせよ梅詢にせよ、宋初の高級官僚が職務である文書作成
に倦んだ時、のんびりひなたぼっこしている読み書きもで
きない兵卒の身に羨望を覺えたことを傳えているこの話は、
文字を扱うことを職掌とする官僚階層の共感を呼び起こし
ながら、傳えられたのであろう。彼らが文字と縁がない生

き方に懂れるのは、官の仕事への倦怠、嫌惡が直接の契機になつてゐるのだが、官僚と老兵とが向かい合つてゐる構圖のなかには、官僚としての身分に覺える優越感も潜んでゐるかに思われる。しかしそれを引く陸游は、すでに官を辭したあとの身であり、官僚生活への嫌惡から發した羨望ではない。讀書人として書物を讀み、詩文を書き續けてきた自分の生涯、それと引き比べて字など讀まずに日だまりにくるまれてまどろんでいる生き方が對峙されているのである。

陸游の長い文學活動も最後に近づいた嘉定二年（一二〇九）、八十五歳の作にも言う、

「病中雜詠十首 其一」（卷八五）

半年不讀書 半年 書を讀まず

顧影疑非我 影を顧れば我に非ざるかと疑う

乃知百年中 乃ち知る 百年の中

如此過亦可 此くの如く過すも亦た可ならんと

書能作汝崇 書は能く汝の崇を作す
識字果非福 字を識るは果して福に非ず
明年倘未死 明年 倘し未だ死せざれば
樂哉駕黃犢 樂しきかな黃犢に駕さん

病氣のために半年間も書物を手にしない日々を過ごしてきた。陸游の長い生涯のなかでも、文字から離れた暮らしをかくも長く續けたのは、それまでになかったことだったに違いない。そこで彼は考える、このような生き方もあり得たのだ、と。自分は常に文字・書物とともに生きてきた。しかしその人生は幸福だっただろか。否。「書能作汝崇、識字果非福」。文字・書物は逆にわたしの人生を不幸にしたのではないか。餘生は農民と同じように牛に跨つて、文字と無縁の快適な生き方を味わうことにしよう。

晩年の陸游は上に掲げた詩以外にも、文字・書物とは縁がない生き方をしている人々の幸福、それに對する羨望の思いを、以下に列擧するように繰り返して唱っている。

「遣興」(卷五二)

「興を遣る」

馬跡車塵不到門
暮年萬事付乾坤
讀書浪苦只取笑

馬跡 車塵 門に到らず
暮年 萬事 乾坤に付す
書を讀みて浪に苦しむは只だ笑

識字雖多誰與論

字を識ること多しと雖も誰か與に論

ぜん

骨相元非金馬客

骨相 元より金馬の客に非ず

夢魂空繞石帆村

夢魂 空しく石帆の村を繞る

濁醪幸有鄰翁共

濁醪 幸に鄰翁の共にする有り

莫厭從來老瓦盆

厭う莫かれ 從來 瓦盆に老ゆるを

「砭愚」(卷五八)

「愚に砭す」

儲藥如丘壠

藥を儲うること丘壠の如きも

人愚未易醫

人の愚は未だ醫すに易からず

信書安用盡

書を信ずるは安ぞ盡くするを用いん

見事可憐遲

事を見るは遲きを憐れむべし

錯自彈冠日

錯りは彈冠の日よりし

人生識字憂患始(川合)

憂從識字時

憂いは字を識る時よりす

今朝北窗臥

今朝 北窗に臥し

句句味陶詩

句句 陶詩を味わう

「嘉定己巳立秋得膈上疾近寒露乃小愈」(卷八四)「嘉

定己巳の立秋、膈上の疾を得るも寒露に近づきて乃ち小

しく愈(い)ゆ」

束書不觀萬事休

書を束ねて觀ず 萬事休す

誰令識字惹閑愁

誰か識字をして閑愁を惹かしめん

胸中作崇知何物

胸中 崇を作す 知んぬ何物ぞ

不是當年老督郵

是れ當年の老督郵にあらざるや

文字・書物と無縁に生きる人々は、穏和な農村で靜かな

暮らしを営んでいる。それはちょうど老子の理想とした平

和な村落のイメージと重なる。實際、『老子』には「絶學

無憂」の語もある。「識字」を人間の「憂患の始め」とす

るのは、古く老莊の思想に由来しているといえるだろう。

それは儒學が學を人の営みの根幹とするのに對峙する、も

う一つの思想であつた。文字を知ることと不幸とする思考は早くからあつたにしても、讀書人自身が自分の経験や生活のなかから實感としてその嘆きを發するのは、かなり遅れるのである。宋代に文人官僚が社會のなかで定着し、讀書人というものの觀念が社會的にも個人的にも十分に固まり、成熟した時に至つて、讀書人たることへの懷疑が生じてきたのだろう。

「文」に携わる立場から文字すら知らない人々の生き方を羨望した陸游には、一方でこんな詩句もある。淳熙五年（一一七八）、合江から涪州へ向かう途次の作とされる「漁翁」（『劔南詩稿』卷一〇）にいう、

江頭漁家結茆廬	江頭の漁家 茆廬を結ぶ
青山當門畫不如	青山 門に當たり 畫も如かず
江煙淡淡雨疎疎	江煙淡淡として雨は疎疎
老翁破浪行捕魚	老翁 浪を破りて行きて魚を捕らう
恨渠生來不讀書	恨む 渠は生來 書を讀まずして
江山如此一句無	江山此くの如きも 一句も無きを

我亦衰遲慙筆力 我も亦た衰遲して筆力を慙じ
共對江山三歎息 共に江山に對して三歎息す

江山の美に恵まれた地を生活の場としている漁師は目に一丁字もないために、その美しさを詩文にあらわすべがない。ここには山水の美はことばに表現して初めて美たりうるというもう一つの觀念が表明されている。それは陸游の表現活動を支えてきたにちがいない。世界はことばを通してこそ認識され享受されるという考えと、「文」から解放された生き方にあこがれる心情、一見矛盾するかのようなこの二つは實は相容れないものではない。むしろ表現者陸游の内部にあつた重層的な思いを明らかにしてくれる。

先の陸游の詩句に端的に見られたように、庶民に對する優越性を士大夫自身が自問するような言述が文學のなかにあらわれることは、讀書人の精神の柔軟さと健全さを示している。そしてさらには文學というものが社會體制を越えた感性や思考を表明する器であつたことをも示している。

註

- ① 孔凡禮點校『蘇軾詩集』（中華書局、一九八二）卷六。日本語譯注は、小川環樹・山本和義『蘇東坡詩選』（岩波文庫、一九七五）及び『蘇軾詩集』（筑摩書房、一九八四）第二冊に見える。
- ② たとえば「蘇東坡の一生とその詩」（『小川環樹著作集』第三卷、筑摩書房、一九九七）に「石蒼舒の醉墨堂」に見られるごとく、彼の詩はしばしば警句で始まる。「人生 字を識るは憂患の始め。」など。
- ③ 四川省文史館編『杜甫年譜』（學海出版社、一九八一再版）による。
- ④ 算用數字は花房英樹による白居易作品番號。卷數、制作年代は朱金城『白居易集』（上海古籍出版社、一九八八）による。
- ⑤ ともに錢仲聯『韓昌黎詩繫年集釋』卷九（上海古籍出版社、一九八四）。
- ⑥ 劉學鍔・餘恕誠『李商隱詩歌集解』（中華書局、一九八八）八六三頁。
- ⑦ 『劍南詩稿校注』（上海古籍出版社、一九八五）。以下、陸游の詩の制作年代は同書による。
- ⑧ 孫望校『元次山集』（中華書局、一九六〇）卷二。但し陸游の取った句は「峰谷呀回映」に作る。